



本文・イラスト: myu-po

さんしま！

（秘密の関係）

体験版

目次

一章	：	：
		恋人関係（全文）
二章	：	：
		無邪気なスキンシップ（ダイジェスト）
三章	：	：
		禁断の関係（ダイジェスト）

四章 ……

五章 …… 真綾の初めて（ダイジェスト）

六章 …… 久美の目撃（本文なし）

久美の覚悟（本文なし）



「でね……ここには、この公式を使えば……ほら、簡単に答えが出せたでしょ？」
優しいメゾソプラノの声音が、ピンク色をした唇の間から漏れ出た。

倉田和久は、そんな声も耳に入っていない様子で、勉強の内容そっちのけで自分の左に座り数学の説明を一生懸命してくれている女の子をじっと見つめ続けていた。

その女の子、高木久美は自分をじっと見つめる和久の視線には気づかず、教科書の内容の説明を続けている。

小柄な身体に見合った小さな顔にパツチリした目、まだ幼さを残しながらもすらっと通った鼻筋に小さな口は、間違いなく誰もがかわいいと認める容姿をしていた。

ふだんは真っ白のきめ細やかな肌が、お風呂上りのせいではんのりピンク色に染まっている。それが、普段の彼女からは感じられないような色気を体からかもし出している。

肩まであるセミロングの髪の毛は、黒くつやつやと光り輝いていて、まだわずかに湿っていた。久美の顔が動くたびに髪の毛は舞い上がって、シャンプーの香りがふわっと和久の

鼻腔をくすぐる。

ピンク色のチェック柄のパジャマの子供っぽい感じがまた、幼い体型と容姿に相まって久美にはぴったりと似合っていると、和久は思っていた。

和久と久美は従姉弟である。

久美は和久より一つ年上で、姉のような存在だ。

現在和久は、久美の母……つまり和久の伯母に当たる人物の家で暮らしている。他に久美には姉が二人いて、その二人も現在一緒の家で暮らしていた。

和久が物心つく前に父親は死んで、小学生の頃に母親も亡くなっていた。父は胃ガン、母は脳卒中だった。身寄りの無くなった和久は、生前母と一番仲の良かった伯母さんに引き取られることになった。

小さい頃からちよくちよくと、伯母の家には遊びに行っていて三姉妹とも顔なじみだったから、新しい家での生活に和久が馴染むのには、そう時間はかからなかった。

新しい学校や周囲の環境にもすぐ慣れることができた。両親を無くしてもなお、明るく振舞っていられるのは、従姉妹たちのおかげと言えた。

母が死んだときの和久は、それはもう泣いてばかりいた。事あるごとに母のことを思い出

しては目に自然と涙が溜まり、それは頬を伝い零れ落ちた。

突然すぎる母親との別れは、幼い子供の心には深く傷を作ることになった。そして、そんな和久の面倒を誰よりも見ていたのが久美だった。

和久の母親の代わりを伯母以上にして、和久と一緒に寝て、寂しさを紛らわせたりするなど、和久のことを一番に気にかけていた。そのため、二人はいつも一緒にいることが多かった。和久も、そんな久美に心を開いていった。

今こうして和久の勉強を見ているのも、和久が家に来てからずっと続けられている事である。和久の成績が良くなって、あまり必要が無くなった今でもしているのは、半ば習慣と化しているからだった。

そして、現在久美の両親は留守にしていた。父親が勤める会社の海外の工場の従業員指導のため二、三ヶ月の出張にでている。母親も、そんな父の面倒を見るために一緒についていてしまったので、三姉妹と和久の四人で暮らしている状態だった。

和久は久美と二人っきりで部屋にいる状況を愉しむわけでもなく、ましてや久美の教科書を説明する言葉など、まったく頭に全く入ってきていなかった。

（言うぞ……言うぞ……）

和久の頭の中では、この一言だけが反芻していた。

今までずっと一つ屋根の下で暮らしてきて、和久がいつでも隣を見れば、久美の顔がそこにはあった。そして、気が付けば和久が久美のことを好きになっていたのは、当然といえた。普段の何気ない会話、何気ない久美の仕草の数々が、和久の胸の鼓動を高め、胸を熱くさせた。



——二日前の金曜日

和久に勉強を教えるのが時間が終われば、久美は普段ならすぐ自分の部屋に戻るのだったが、その日に限ってはいつまでも戻ろうとしなかった。そして、押し黙っていた久美が、唐突にこう告げた。

「あのね……今日、お姉ちゃんと同じクラスの3年生の先輩に、告白されちゃったの……」
「えっ！」

不意の久美の言葉に和久は面食らった。

「そ、それで、へ……返事はしたの？」

和久は冷静を装うと思ったのだが、その声は震えていて、自分でも明らかにおかしいこと

がわかった。

（お、おかしいな……なんでこんなに声が震えるんだろう……）

「ううん、三日後の月曜日でいいって……その……か、和ちゃんはさ、どう思う？」

久美は容姿が良く友達などからの信頼も厚い。学校での人気は結構ある。久美の学校での評判は和久も聞いたことがあった。

しかし、久美が告白されるということは、これまで不思議なことに無かった。

久美はかなり人見知りする性格なので、初対面の人と打ち解けるにはかなり時間がかかる。それに加え、特に男の人と話すのを苦手としていた。

まともに久美が会話ができる男性は、久美の父親と和久くらいと言ってもよかった。だが他にも理由はあった。

それは和久が知らない事なのだが、学校では二人はとくに付き合っているものと思えるほどの仲のよさを本人たちの自覚無く周囲に見せ付けているのだ。そのため、和久と久美の中を見た生徒は誰も声を駆けられる余地が無い。という側面もあった。

「そ、そんなの知らないよ……久ねえが、付き合っても良いって思ってるなら、付き合ってもいいんじゃないの？」

和久の強がりから出た言葉だった。つい、思っていた事とは反対の言葉が出てしまう。

和久はその先輩に嫉妬していたと言っても良い。本当のことを言えば、付き合って欲しはずは無い。

今まで久美に対して、何となく感じていた感情、和久はそれが何なのかやっとわかった。
(ああ……僕は、久ねえのことが好きなんだ……)

だからといって和久が告白することは、いつも身近に居るからこそ恥ずかしくて、言えそうにもない。

「そ、そう……」

久美は和久の言葉を聞いて、悲しそうに顔を伏せた。

和久の胸が、ズキンと痛んだ。

「ごめんね……こんなこと聞いて……じゃ、じゃあ、明日の朝ご飯の支度もあるし、今日はもう寝るね……おやすみなさい」

と言って久美は和久の部屋から出て行ってしまった。

「あつ、久ね……」

和久は何か言葉を駆けようと思ったのだが、それよりも早く久美は部屋から出て行ってしまった。

久美が出て行った後、ボタンと音を立てて閉まるドアを、和久はずっと見つめ続けていた

のだった。



——そして現在

明日がその久美が返事をする月曜日だった。

もはや和久には一刻の猶予も許されていなかった。

明日になれば、久美は先輩に返事をしなくてはならない。ありえないと和久は思っていたが、もしかすると姉の顔を立てるために、OKの返事をしてしまうかもしれないと危惧していた。

「ね、ねえ……聞ってるの？ かずちゃん？」

何を言っても相づちも打たない和久を、久美もさすがに怪訝に思った。

久美の顔がくると和久のほうを向いて、小さな唇が動いた。

久美は恥ずかしがりやで人見知りする性格のせいかな、その声はどこか遠慮がちで小さい声で話す。

キツと、和久が久美の顔を見つめた。自然、二人の目と目が合った。

（ドクン、ドクン）

和久の心臓が高鳴る。胸がやぶけて心臓が飛び出るのではないかというくらい、自分の心臓の鼓動がはつきりと聞こえてきた。

（言うしかない！）

和久はついに決心した。

「ひ、久ねえ！」

あまりに緊張していたので、少し声が裏返ってしまった。

「な、なに？」

久美も和久のただならぬ雰囲気、何か重要なことを言うのだという事が分かったのだろう。緊張した面持ちで和久の次の言葉を待っている。

「久ねえ……あの、その……ぼ、僕は、久ねえのことが……す……好きなんだ！」

「えっ？」

頭の中が真っ白になりかけて、だいぶ言葉を嚙んでしまった。久美も理解できなかったのだと思って、もう一度告げる。

「好きです！だから……こ、恋人になってください！あの先輩への返事は……あの人とは付き合わないで欲しい！」

和久の告白を聞くと、久美は顔を下に向けてうつむいてしまった。

「久……ねえ？」

覗きこんでみると、久美の目からは涙がこぼれていた。

「ひ、久ねえ……ど、どうしたの？」

告白したことは、そんなにも久美を悲しませてしまうことだったのだろうか。と、和久は焦った。

もしかしたら久美は、ずっと姉弟のような関係でいたただけなのかもしれない。そんな不安がよぎる。

「うれしいの……」

久美は確かにそう言った。

「え？」

意外な返事が返ってきて、思わず和久は聞き返してしまった。

「だって……やっぱり和ちゃんから断ってって言って欲しかった。あの時……和ちゃんが付き合っちゃえば、なんて言うから和ちゃんは私のことなんてやっぱり姉弟みたいにしか思っていないのかなあって思ってたから……」

「そ、そうだったんだ……ごめん。本当は、あんな事言うつもり、無かったんだ……」

内心、和久の心は弾んでいた。久美も同じようなことを考えていたことに。

「ううん……私ほら、知らない人と話したりするって苦手だし……大丈夫な男の子って、和ちゃんくらいだし……それにね……私だって、ずっと和ちゃんの事、好きだったから……」

「久ねえ……」

「だからね……かずちゃんの方からそんなこと言ってくれて、私すごく嬉しい！」

「じゃ、じゃあ……恋人になって……くれますか？」

改まって和久は聞いた。

「……はい！」

はつきりと久美も返事をした。

二人とも恥ずかしさで顔が耳まで真っ赤に染まっていた。

目が合うと、気恥ずかしさからお互い顔をまともに見つづけることができなくなつて、二人とも下を向いてうつむいてしまった。

静寂が部屋の中を支配した。和久の部屋には壁に掛かった時計の音だけが、コチコチと音を刻んでいた。

「ねえ……」 「ねえ……」

二人が同時に静寂を破った。

「久ねえどうぞ？」

「か、和ちゃんから……どうぞ……」

「じゃ、じゃあ……」

恋人になったからには、どうしてもしたい事があった。ずっとさつきから言うぞと決めていたことだ。

勇気を振り絞って、和久は久美に告げた。

「き、き、キスしても……いい？」

久美は面食らったようだったが、どこか、そういうことを言われるのではないかと思っていたように、

「えっ……う、うん……い、いいよ……」

と、すぐに答えてくれた。

ただでさえ赤く染まっていた二人の顔が、さらに真っ赤になった。

「ほんと！」

思わず和久は確認してしまう。

「うん……いいよ」

気恥ずかしそうに久美は再びそう答えた。

「じゃあ……キス……」

腰掛けていた椅子を横に並べて顔を近づけた。和久の目と鼻の先にその柔らかそうな久美の唇が迫った。

「い、いくよ……あっ！目、閉じないと……」

和久に促され、久美がぐっと目を閉じた。

久美が逃げないよう念のため、肩をつかむとびくツと久美の体が強張った。

残念ながら、そんな時に気の利いた一言を言えるほどの経験は和久は持ち合わせていない。何もかける言葉を見つけれず、そのままそつと顔を近づけた。

勢いあまって歯をぶつけてしまわないよう、慎重にゆっくりと唇と唇を重ねる。

「ん……」

（やわらかい……これが：久ねえの唇なんだ……）

数秒間の初めてのキスだった。キスを終えると、唇を離して少し顔の距離をあける。

和久は改めて久美と恋人同士になった実感を噛み締めた。

「ね、ねえ……、私、胸がないけど、本当にいいの？」

「え？それどういう意味？」

恋人になった余韻を愉しんでいたというのに、いきなりの久美からの質問は、冷や水を浴

びせるかのような内容だった。

「だって和ちゃん、よくお姉ちゃんたちのおっぱいをちらちら見てたから……胸がおっきいほうがいいのかなって……思ってたんだけど」

「えっ！そそ、そんなことないって！」

と言いながらも、ちらりと久美の胸元に目がいつてしまった。

確かに久美の胸は、彼女が卑下するように全くといってもいいほど、ふくらみらしきものはない。

推定Aカップの胸は、ブラジャーを着けなくてもいいのではないかというほどで、よって今着ている薄いパジャマの上からでも、その存在感は感じられない。

「その時のかずちゃん、でれーつと鼻の下伸ばしてたし……だから、かずちゃんは、おっぱい大きい女の子が好きなのかなって思ってたけど……そっか、ちよつと安心しちゃったかな」
「うっ……それはその、男だから胸には目がどうしてもいっちゃうだけで……そのう……胸のあるなしで、女の子を好きになったり、嫌いになんてなるわけないよ。久ねえだから、僕は好きになったんだから。ほんとに……うん！」

まるで自分に言い聞かせるような言い方になった。あまり締まった言い方にはならなかった。で、和久はちよつと情けなくなった。

「じゃあ、本当に私でいいの？」

久美としては、重要な問題だったのだろう、和久の言うことを聞いて、嬉しそうに顔をほころばせていた。

「本当だよ！僕が好きなのは、久ねえなんだから！」

「うん……ありがとう……」

久美は、また目に涙を浮かべて喜んでいた。

「あつ……もうこんな時間だね」

「あ……ほんとだ」

久美の目線につられて、壁に掛かっている時計を見れば、すでに午後の十一時を指そうかというところだった。

「じゃ、じゃあ……明日早いし今日はもう寝なきゃいけないから……部屋に戻るね」

余韻を愉しむのでもなく、明日の支度をしなくてはいけないという事実が、二人を現実へと戻す。

「う、うん……おやすみ、久ねえ」

「おやすみ、かずちゃん、朝寝坊しないでね」

「わかつてる」

久美は、名残惜しそうに和久の部屋から出て行った。和久も、久美が出て行った後のドアを、なごり惜しそうに見つめつづけた。

その夜、和久が眠りにつけたのは、和久が布団の中に入ってから三時間後の事だった。

―二章 無邪気なスキンシップ―



「……えーい！」

突然、真綾がそう叫んだ。

どうやって起こすか次の一手を考えていた和久は、一瞬何が起こったかわからなかった。真綾は布団の中から手を伸ばし、和久を布団の中に引っ張り込んでいた。

ベッドがぎしぎしと軋む音が耳に入って、それから、ずしりと自分にぐぐつとのしかかる掛かる重み。暗闇に包まれる中、真綾の呼吸を近くに感じた。

抱きしめられているのだとわかった。

「んー……暖かあい」

「ちよ、ちよつと！まーねえ！」

髪の毛から漂うシャンプー匂いと、女性独特の体臭が交じりあった甘い香りが和久の鼻腔をくすぐる。

和久をベッドに引きずり込んだ真綾は、体の半身を和久の上に乗つけて和久を押さえつけていた。

自分の頬を和久の頬にすりすりとしりつけて、腕を背中に回しぎゅっと抱きしめて離そうとしなかった。

ペツたんこな久美の胸の分を、生まれる時にあらかじめ吸っておいたかのような、小ぶりのスイカほどはあろうかという豊満な胸が、和久の胸板と真綾自らの重さによってつぶれて形が歪む。

（やわらかい……それに……お、重い……おっぱいって一体何キロあるんだ！）

胸の中に詰まった脂肪の重さは意外にある。という、分かっても仕方が無いような知識を学習した和久であった。

自分の胸の上で息づく、真綾の胸の鼓動の脈動に和久の心臓がドキドキ高鳴った。

真綾の太ももが、スウェット越しに股間に押し付けられる。

（わ……わっ、やばい！）

いつも、大胆すぎるくらいのスキンシップをしてるのが真綾だが、今日のは明らかに度を越している。

背中に胸を押し付けられるくらいのことならしよっちゅうあったので、ちよつとのは冷静さを欠くことなどなかった。

だが、いきなりベッドに引きずり込まれたせいで、頭の中が混乱していた。

理性を欠いた頭脳は、本能を押さえることができず、和久の下半身は本能に任せた忠実な反応を示し始めた。

無理にでも力をこめて引き剥がせば、何とかなるだろう。しかし、正常な若い男子である和久に、この豊満な肉体の魅力を押し返すには理性が及ばなかった。

それに、無理やり押し返して真綾を邪険にあつかうことも、気のやさしい和久には到底できない事なのだ。

ペ〇スに血液が流れ込み、トランクスの中で急激に体積を増していく。

（お、大きくなるな！まーねえにばれちゃう！）

このままではやばいと思ったのだが、こればかりはもはや意思の力でどうにかなるものではない。

「ちよ、ちよつと、もういいでしょ！早く起きないと」

何とか股間のふくらみを悟られないよう体を動かし、真綾の絡みついた足を外そうとするのだが、運の悪いことに和久の押しのけようとする力に逆らった真綾の足は、よけいに和久の身体に絡み付いてきて、はずみで股間のふくらみに思い切りぶつかってしまいうことになった。

（しまった！）

今まではしやいでいた真綾が、ぴくつと動きを止める。

「あれえ？これなあに？」

さつきまで触れていた和久の身体に、先ほどまでには感じられなかった、固い部分があることに気がついた真綾は、背中に回していた右手を解き、固くなった和久の部分にその手を押し当てた。

「あつ、やめてってば！そこはなんでもないから！」

すりすりと言綾が右手の平で股間を撫で回す。

身動きの取れない和久は、その手の動きをやめさせることもままならず、言綾のなすがままにされてしまった。

ますます和久の股間のふくらみははつきりとした硬さを持ってその存在を言綾に示してしまった。

「うあつ」

言綾の右手が和久の勃起を包み込む様に握り締めた。勃起をつかまれた拍子に、和久は思わず声を漏らしてしまう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——トントントン………

外からスリッパで階段を駆け上ってくるときに生じる音が、真綾の部屋の中にまで伝わってきた。

いつまで経っても2階から降りてこない二人を心配して、久美が様子を見に上がってきたのだ。

和久は自分の役目が真綾を起こしに来た事をはっと思い出した。

壁にかかっている時計をちらりと見つめる。真綾の準備にかける時間も考えると、そろそろ学校に遅刻しかねない時間だ。

担任が千佳である和久にとっては、彼女の授業だけでなくホームルームさえも遅刻することは許されないことである。これ以上遅れれば、真綾でなく和久のほうが危機にさらされることになるのだ。

千佳は、いつもこのギリギリの死闘が繰り広げられることは知っているはずだが、そんなことを考慮してくれるほど甘くは無い。

「んぷ……ちやぷ……はん」

「ふあっ！」

真綾の舌が尿道を責め上げる。

今まで責めた中ではそこが和久にとって一番感じる所であることに気がついたようだ。執拗に、そこを中心に舌を這わせ始めている。

時折、根元の方をしごきつつ、ぎこちない舌先の動きで、確実に和久を攻めている。

フェラチオに夢中になってはいるが、真綾にも久美のたてた足音は聞こえているはずだ。しかし、一向に真綾はフェラチオを止めようとする気配はない。

「ひ、久ねえがきちやうから、もう……ああ！」

「じゅる……ン……ふあめえ」

真綾の吸い付く口が遠ざかるので、それにつられて、和久は腰を上げて口の粘膜を逃さんとしていた。

いつしか、和久もこの甘美なスキンシップから抜けられなくなっていた。

そうしている間に、ついに久美の足音が部屋の前まで来た。ぴたりとドアの前で足音が止んだ。

——コンコン……

控えめなノックの音が部屋の中に響く。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「それはな……こういうことだ」

千佳の顔が目の前に迫ったかと思うと、唇に柔らかい感触を感じた。

驚愕の度合いが大きすぎて、とっさにはわが身に何が起こったのか理解することができていなかった。

（キ、キスされてる！）

突然唇を奪われた和久は、驚きのあまり目をいっばいに見開いたまま、どうすることもできなかつた。

千佳の唇からは、予想外に甘い香りが漂っていた。

「んん！」

千佳の手が和久の首に絡みついてきた。

頭を後ろに引こうと思っても、ぐっと千佳が頭の後ろを押さえるので、顔を離すこともできな。今だに続けられているキスに、和久はただ黙って耐えることしかできない。

（息が……苦しい……）

和久は鼻で息をする事も忘れていた。

（このまま窒息して死んでしまうのだろうか……）

漠然とそんなことが頭の中に浮かんだ。

「んっ」

「ぷはっ……はぁ」

やっと千佳の唇が唇を離してくれた。長いこと水の中に潜っていて、やっと浮かび上がった時のように、はあと、大きく息を吸い込んで肺に空気を送り込んだ。

そんな様子を見て、千佳は笑みを浮かべた。

「私はな……純真なまだ何も知らない少年を、快樂無しでは生きていけないくらい虜にするのがたまらなく好きなんだ」

「そ、そんな……」

和久は絶句した。

そんな衝撃的なことを本人に真正面から言って驚かせるのは、授業中生徒を叱ったときのことを思い浮かべた。

「いいぞ、その表情……怖がることはない。すぐに、気持ちよくしてやる」

☆☆☆☆☆☆☆☆

千佳はペ〇スに奉仕をしながらも、そんな和久の顔色をじっと窺っている。

「ぐっ……うっ！」

（さっきよりも、なんだか気持ちよくなってる？そんな……）

気のせいかな、先ほどよりもペ〇スに与えられる気持ちよさが微妙に増していることに和久は気がついた。

「んん……あむ……ふっ」

ぬらつく勃起の表面をぬめぬめと這いまわる舌は、一番感じるポイントからわずかにずれたところをしつこいくらいに責めてくる所は同じだった。だが、さっきまで我慢できていたことなのに、心なしか千佳が段々うまくなってきているような気がしてきていた。

「ふふ」

千佳は和久があえぎ、悶える姿を見るためにわざと和久をじらして愉しんでいたのである。そうやってじらしながらも、和久の興奮が下がりそうな気配を見せると、性感が集中しているスポットを尖らせた舌先ですかさずくすぐり、また和久の興奮を高める。

和久は呼吸を荒げて、いつまでこの微妙な気持ちよさが続くのだろうと思っていた。

和久は、すでに千佳の罠にはまりつつあった。

「ち、千佳さん？、何かおかしいです……」

さすがに和久も下半身の違和感に気が付いた。

ずっと勃起っぱなしのペ〇スは病気かと思うほど腫れ上がり、劣情まじりの血液をギリギリにまで詰め込んだ亀頭は、今にも破裂しそうだった。

「はああ……」

和久の目は熱に浮かされたように潤み、半開きになった唇からははしたない喘ぎがひっきりなしに漏れてくる。

普段オナニーする時ならば、とつくに射精していてもよいほどの刺激が与えられているはずだった。

しかし徐々に快感に慣らされていったせいも、まだ射精には至っていない。

パンパンに膨らんだペ〇スは、もう精液を吹き出してもおかしくはないのに、まだまだ刺激を求め続けている。

「なんだ？なにかしてほしいのか？」

千佳はわざとらしくそう尋ねた。

千佳の勝ち誇った顔を見て、和久も今更ながら気がついた。

和久は、千佳を甘く見すぎていたことを後悔した。

千佳は、和久自ら千佳を求めるように言わせようと画策していたのだ。

「は、はやく……」

これ以上言葉を続けられれば、それはもう千佳に懇願するための言葉しか出ない気がしていた。理性がどうしてもこの先に言葉を続けるのを拒んでいた。

「早く何をして欲しいんだ？言ってみろ……だが、言った時は、自分でもわかっているんだろう？」

千佳は和久の心なんてはじめてから見透かしていて、和久の口からどうしても言わせようとするのだ。

千佳の手によって、べとべとに塗りたくられた唾液がうすく塗り伸ばされ、ペ〇スは焦らされ続ける。

和久は千佳の真意を読み取り、くやしさに思わず目に涙が浮かんだ。

— 四章 真綾の初めて —

☆☆☆☆☆☆☆☆

膝をついて立っていた千佳が、その上半身を和久の身体に倒した。そして、乳房を和久のぺ〇スにぴたっとくっつけた。

「えっ？」

和久にとって、その動作は予想外の動きだった。

そのまま両手を胸の外側から押し込んで、胸の谷間にぺ〇スを挟み込んだ。

「はうっ……」

挟み込んだ両胸は、膣の中に勝るとも劣らないような気持ちよさをぺ〇スに与えた。

「真綾もそっちから胸で挟み込んでみる」

「はい……っ……こ、こうかなあ」

少しぎくしゃくしながらも、同じように真綾が胸をくっつけてきた。

合計四つの柔らかな乳肉で、和久のぺ〇スは挟み込まれた。埋もれた亀頭の先っぽが乳肉の中心からぽつんと心細げに顔を出していた。

「準備できたか。そうしたら……こうやって……体全身を動かして、胸を動かすんだ」

千佳が上半身を揺らすと、それにつられて胸も前後に動き出す。はさまれた和久のペ〇スは、先ほどうぶられた時の千佳の唾液を潤滑液にして、胸の谷間でゆらゆらと胸の中で漂っていた。

「ああ……」

「ほら、和久の顔を見ているよ？気持ちいいと、こんなかわいい顔になるだろう？」

「本当だ……かずちゃん、気持ちいいの？」

「そ、そんなの……」

「気持ちいいというよりも恥ずかしさの方が勝っている時の顔だな……ほら、真綾もしてみろ」

千佳は確実に和久の今の気持ちを表情から読み取る。

「うん……こうかなあ」

真綾も千佳の真似をして、上半身を前後に動かして胸でペ〇スをこすり始めた。千佳の胸に比べると、真綾の胸は胸の大きさの割に固い感じがした。

「ふわっ……こ、こんなの……」

二人からなる不規則な胸の動き、左右からの異なる胸のリズムがペ〇スに刺激を与え続ける。ペ〇スの先端から溢れ出る先走りの液が零れ落ち、潤滑液が途切れること無くペ〇スは

スムーズに胸の狭間で弄ばれ続けた。

「もつと気持ちよくするにはな……」

胸の隙間からひよこつとでた亀頭の先に、千佳が舌先を這わせた。

「ふむ……ン……じゅぷ……」

「はうっ！」

尿道口付近を舌先を使ってちろちろと舐める。

「うわー面白そう！」

真綾もそう言って嬉々として顔を精一杯自分の胸元に傾けて、口を自分の胸に埋もれてい
るペ〇スへと向けた。

「ン……ペロ……ちゅっ……ン」

真綾が同じように舐め始めると、見る見るうちにペ〇スは2枚の舌によって、びちやびちや
に唾液をまぶされ濡れ光る。益々血の色を濃くしたペ〇スに、二人の舌が奪い合うように亀
頭に舌を絡めてきた。二人の動きは、次第にエスカレートして口の中へと亀頭を吸い取る競
争のようになってきていた。

Copyright 2005 美遊穂堂